ぞうじるいへん・ざつじるいへん

#51 雑字類編

原撰：柴野栗山（しばの・りつざん　1736-1807）
刊行：天明６年（1786）

◇◇◇

的な拠り所となった。奥平昌高『蘭語訳撰』などがその例である。

■　作者

原撰者（草稿）柴野栗山は、江戸中・後期の儒学者。18 歳で江戸に遊学し、昌平黌に学んでいる。その後幕臣となり学制の改革などを行っている。詩、文章でも名高い。本書は、栗山が幼年期にまとめた草稿を更に編集したものである。

重修は弟の柴野貞穀（しばの・さだよし　？-1786）が行い、のちに栗山の門人・辻子礼（つじ・しれい　1752-1775）も校訂書写に加わっている。２人についての資料は少ない。貞穀は京都で今枝栄済に医学を学び開業していたが、親を侍養するため帰郷して開業し、家を守った。子礼は、福井大車に医学を学び、栗山に師事したが、24 歳の若さで病没している。

📖　本文を読む

＜影印復刻＞

『雑字類編　影印・研究』杉本つとむ監修 藁科勝之著 ひたく書房 1981［813/23/1］　※別冊索引あり

📖　参考文献

藁科勝之「研究編」（『雑字類編　影印・研究』杉本つとむ監修 藁科勝之著 ひたく書房 1981）［813/23/1］

竹治貞夫「柴野栗山原撰「雑字類編」の成立と刊刻について」（『汲古』12 汲古書院 1987）［Z023.05/32］

杉本つとむ「近世唐話漢語辞書とその考察」（『杉本つとむ著作選集６　辞書・事典の研究』杉本つとむ著 八坂書房 1999）　※当館未所蔵

『図説日本の辞書』沖森卓也編 おうふう 2008［813/116］